

フィールドノートから

崔吉城

私は韓国でも海外調査を行っていたが日本に職場を移してから毎年海外調査を続けてきました。それは主に科学研究費によるものであります。青木保先生（東京大学）の科研で東南アジア（スリランカ、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシアなど）と中央アジア（ウズベキスタン）、諏訪春雄先生（学習院大学）の科研で中国、ベトナムなど、佐々木宏幹先生（元駒沢大学）の科研でロシア（シベリア、カムチャッカ、サハリン、カザフスタンなど）伊藤亜人先生（東京大学）の科研で韓国の調査、故村上先生（広島大学）の科研で中国朝鮮族の調査を行い、井上星児先生（広島大学）の科研で韓国の調査を行っております。このように各国の調査ができたことは、諸先生方に支えられてきたことであり、先生方々には深く感謝しております。私自身が代表として科研によるサハリン研究調査も深めることができたのも上記の調査があったからこそです。また講義やシンポジウム、講演などで日本各地を広く旅行することもできました。沖縄県立芸術大学、鹿児島大学、熊本大学、島根大学、広島女子大学、鈴峯女子短期大学、富山大学、神戸大学、大阪大学などの関係者には大変お世話になりました。

ここでは海外調査研究旅行のノートを若干紹介します。

1. サハリン北部への調査の旅

私は 2001 年夏サハリン北部の調査をした。サハリンの主都ユズノサハリンスクから北方 638 キロにあるノグリキまで汽車で行った。ノグリキは数年前からぜひ行ってみたいと考えていた。午後 9 時発の特室 13-14 番が指定席だった。その列車は日本の夜行列車のような 2 段ベッドになっており、ドアがきちんとついた個室のようなものである。普通の個室は 4 人用で 640 ルー

ブルなのに、特室は2人用になっており、1560 ルーブルにもなる。この時に指定された特室はドアが故障しており、それを車掌に話すとすぐに部屋を変えてくれた。これは女車掌の態度から泥棒に注意しているようであった。隣の室には英国人が乗っていた。彼は自己紹介を、ジョークを混ぜて話してくれた。

英国南部で生まれて海洋学を勉強して船長になった。タイはもちろんベトナムとカナダ等を往来しながら仕事をしている。しばしばひとり旅行をしたが、タイの食堂で仕事をしているとき 25 歳のタイ女性と交際するようになって英国人婦人と離婚して、タイ女性と結婚して二人の娘がいるが、長女は 5 才で、二人目の娘は 3 才 7 ヶ月である・・・。

日本人とこんなプライベートなことまで対話をするには何年もかかるかもしれないのに、彼の個人生活を容易に聞くことができた。それで互いに一気に親しくなった感じである。それは旅行という状況が作る気分であろう。このような対話をしている時に女車掌がきてロシア語で無条件荷物を置いて皆降りろというジェスチャーをする。

しかし、ロシア語がわからない私は全く状況がわからず座っていた。その時慌しく案内者が上がってきて言うには、汽車に爆発物が装置されているという電話連絡があつて、調査をするために皆降りて待合室で待機しろとのことだった。貴重品だけを持って急いで待合室におりたが、そこからさらに待合室外の広場に出された。ある人はチェチェン問題などでテロかもしれないと恐れていた。またある人は発車時刻に間に合わない人が延着させて乗ろうとして電話をかけたのかもしれないという。大学入試に遅刻した学生が学校に爆発物を設置したという電話をかけて試験時間を延期させたという話をしてくれ、今回もそのような類のいたずら電話かもしれないという人もいた。

結局 9 時出発予定の汽車が 2 時間 20 分遅れて、夜 11 時 20 分に再び改札を行った。改札口には大きいシェパード犬が荷物を一つ一つにおいをかいで調べていた。ところがその犬は食料品が入っているかばんにほえて皆を笑わ

せていた。汽車に戻ってみると、置いたはずの荷物が無い。びっくりして探してみると他の部屋で調査をするために持って行ったという。今回は通訳案内者がいたからよかったが、一人旅でこういうハプニングが起こったらどう対処したらよいかを想像すると、頭の中は真っ白になりそうである。車内は非常に暑かった。暑さに対応する設備は何もない。ドアをあけることも難しい。走り出すと電気が通い始め、涼しい風が入り、過ごしやすくなった。12時に消灯して寝た。

午後1時30分、ノグリキ駅に到着した。ノグリキという地名は<黒い水>というニフキ族の言葉だという。それは油田を暗示したという住民の話だ。ここの油田開発の歴史は長い。私は油田と温泉を見ながら少数民族の村に行った。この地域にニフキ族が1000余名住んでいる。汽車から降りて、予想外に速く走って1時間でノグリキから北に70余キロメートル地点に住んでいる<WAL>という<ウィルタ族村>に到着した。ここにウィルタ族が60人程いる。案内者の金氏がここに昔住んだことがあり、隣人だったミヘイェブ氏の家を訪問した。彼の家は政府が建てたロシア式の家屋である。ゆえにウィルタ族式の建築の特徴は一つもない。彼らはトナカイを飼っている。トナカイは優しく、扱いやすい家畜だという。荷物を運搬したり、食用にしたりする等非常に重要な家畜だ。冬にはトナカイを放牧する。そしてトナカイとともに移動しながら狩猟をするが、今現在、トナカイは放牧する程度であり、完全にトナカイに依存した生活を送ってはいない。むしろ魚を捕って生計をたてている。いまは狩猟の季節で、男たちはトナカイを連れて狩猟するために山に行き、家には老人と女性だけがいる。男たちが狩猟に出かけている間、妻の兄が留守家族を見守っている。基本的にはナナイ族やエベンキ族は魚を捕って生計を維持する。昔ウィルタ族は狩猟に、エベンキ族は魚業という図式があったがいまはほとんど区別がないらしい。

隣のエベンキ族の家に寄った。この辺ではエベンキ族は少なく、15人程度しかない。家の中へ入っていくと女性数人と一人の老人がいた。46才の男性を「おじいさん」、45才の女性を「おばあさん」という。訪問したその日は最高気温27度で最も暑い日だというのにガスで火を炊いて料理をしているために、家の中が非常に暑い。小麦粉をこねて、菓子を作るために火を炊い

ている。いくら暑くても窓を開けるという習慣はほとんどない。地球温暖化がすすめば、こちらの人々は早く死ぬかもしれないという思いが頭をふとよぎった。

ノグリキ博物館は現在修理中であり、臨時に文化館を使用している。科学担当官は2名で、その他合わせて6名の職員がいる。ウィルタ族、ニフキ族などの民芸品が陳列されている。ソ連時代に迷信打破といって伝統的なシャーマンの道具などはほとんど喪失してしまったので、今では貴重な資料になっている。それで今また伝統文化を復元しようとしており、二つのニフキ族伝統芸術団が結成された。科学担当官ノックカリナラというニフキ族女性によれば、ロシア政府は少数民族が伝統的に生活するように推奨しているという。

ニフキ族のアレックスサンドロ(1956年生)氏の家を訪問した。鱒などの魚をひもにかけて干してある。鱒はこの特産だ。彼の父は朝鮮人だという。彼の話によれば父は1947、8年に北朝鮮の咸鏡北道から労働者として単身で来島し、ここでニフキ族の母と結婚した。父は強くて、やさしい人だったという。二人の子供には大声でしかったりすることはなく、常に勉強するように言っていた。彼の兄はロシア女性と結婚して息子が一人おり、完全にロシア人になった。母が亡くなって、父はロシア人と再婚して、二人の娘を産んだ。子供は完全にロシア人になった。

彼の妻の父と祖父は日本人だが、母方はニフキ族である。彼は日本人に会って自分には日本人の血が流れていると話しても、誰も日本人としては認めたくないが、韓国人は父親が北朝鮮出身だと話すと同じ民族として認めてくれたので親しく感じるという。

帰路5時発の汽車に乗った。列車の平均時速は43キロである。車窓からは森林の風景が続いて見える。樹齢10年程と見えるイチイ(一位 yew tree)と白樺等である。山火事で荒れた野原には古木の林が目にはいる。山火事はほとんど不注意で起きるらしい。山火事になっても消防活動はほぼできず焼け尽くし、雨が降ったら鎮火するという。焦げた枯れ木からは新しく若芽が出て育っているのが見える。大きい山火事を起こした女性が現場で逮捕されたことがあったが、彼女は山菜取りにいて、道に迷い、寒くて死にそうに

なったので火をつけて救援を要請したと報道された。山林を焦土化するの
は山火事だけではない。表向きには自然環境保護が叫ばれているが、実際は大々
的に伐木が行われている。ロシア住民たちは国が広くてそこまで管理ができ
ないと考えている。私は国家にこのように管理能力がないのなら大国という
資格がないと思った。

北港のポルナイスク(静香)で少数民族のニフキ族についての調査のため少
数民族博物館を観覧した。その後、旅館を探そうとしていたところ、その博
物館の 30 代の女性学芸員が自分の家に泊りなさいといってくれた。言葉の
問題があるので、ロシア人の運転手と共に、その家に泊ることにした。そし
て、私はロシア人の運転手の車に乗ってそのアパートに行った。その家は玄
関に入って右側に風呂場、その反対側に台所、そして両側に二つの部屋があ
る。大きいのが応接間、その向かい側に小さい部屋がある。そこは 10 歳く
らいの息子の部屋である。応接間にはソファがある。運転手と彼女がロシア
人同士で話しているのを聞きながら、ロシア語のできない私は疲れて、応接
間の床に布団を敷いて早く寝た。当然運転手が応接間で私の隣に寝ると思い
ながら眠った。ところが、朝早く起きてとびあがるほど驚いてしまった。私
の隣に同じように床に布団を敷いて、ピンク色のガウンを着た彼女が寝てい
るではないか。運転手は隣の部屋で子供と寝ている。この状況に私は強くシ
ョックを受けてしまった。いや、困ったというか、どう理解していいのだろ
うか。彼女が私の側に寝ているということはどういう意味なのか。どう解釈
したらいいのだろうか。私は内心、自分を男としてみたのか、あるいは男と
してみていないのか、それとは関係なくロシア人の習慣であろうか、非常に
困惑したのである。

朝の食卓で私はそれをわざわざ話題にした。40 年間旅行をしても若い女性
とこのように一緒に同じ部屋に寝たのは初めてのことであったといってみたが、
彼女もロシア人の運転手もなにも反応しなかった。この事実は特別に変わった
ことではないようである。しかし朝鮮族たちに話してみたら異様な表情をし
た。この時に、「ロシア女性は性的に乱れている」という話も出た。謎はいま
だに解けない。文化論でも説明できない。いや、私自身、明確にその理由を
解きたくないのかもしれない。ロマンチックな思い出として残しておきたい

ような気分でもある。しかし、もしかしたら彼女の部屋のプライベートなところ、あるいは貴重なものを置いている部屋であるからそれを守るためにそうしたのかもしれない、という思いにいたったときは、私のロマンチックな想像はオーバーセンスだったと思い、一気に憂鬱になってしまったりもした。

2. 中国での撮影トラブル

中国の朝鮮族村を訪ねていく途中で起きたことである。私を乗せてくれた馬夫が自転車に乗っていた人と喧嘩し始め、100人余りの見物人に囲まれた。私は喧嘩が終わるのを待ちながら写真を撮っていると、その大群が私に向かってきて、私が写真を撮ったことを問題にし、所持している望遠鏡付きのカメラを奪おうとする。私は中国で、このような場面を何度も経験しているおり、案内者がうまく処理してくれるものと思っていた。以前、雲南省でシャーマン儀礼を観察している時に、同行していた写真作家の鄭君が1カット写真撮ったことにシャーマンが怒り始め、観察もできなくなってしまったことがあった。この時は、ポラロイドカメラである子供を撮ってあげてから、シャーマンが写真に関心を持ち始め、結局シャーマンとの記念写真まで撮影し、無事に調査を終えることができたことを思い出した。しかし、今回は喧嘩の代理戦のようになり、私は群衆に囲まれた。案内者は危険を感じ、移動しながら交渉するという。蜂の巣のような群集がそのまま移動する。フィルムか、カメラを取られる、あるいは、賠償金で交渉になるのかと思っていたが、突然、案内者は朝鮮人村を指差しながら「あの村で話をしよう」と提案した。その時、朝鮮人村で待っている青年が私を迎えに歩いてきた。彼を見た群衆は一斉に走り去り、分散してしまった。なぜであろうか。ただ一人村まで一緒に来たものがいたが、村の青年は「この村に入った以上、ただでは帰れないぞ」といいながら、彼を殴る仕草をしたので真っ青になって逃げたのである。その晩、遅くまで歌や踊りが続いた。朝、数人の青年と食事を一緒にした。話題は今朝、刑務所から出た人の話であった。私はそれを聞いてとても安心した。これはなぜだろうか。彼らには、刑務所が怖くないほど強いし、なにがあっても大丈夫だという安心感がある。治安が悪い中での私の安心感はどこから来るものか。よくよく考えたがいまだにわからない。

3. 日本の炭鉱地を歩いて

これは、2003年10月11日長崎炭鉱地調査に上水流久彦君(広島県立女子大学助手)と安達信裕君(広島大学大学院生)と一緒に行った時の話だ。

ある日朝鮮人の老人P氏に会った。彼の本名はP氏だが、日本名ではM氏と名乗っている。この日本名は創始改名の時につけたのだが、P氏は新羅の子孫として新井になるのが普通である。彼がM氏と名乗るのには理由がある。彼の兄弟は学校で働いていた。そこの日本人の校長先生がP氏を韓国風ではなく和風と呼んでいた。創氏改名のときに、この和風読みの音に合わせて韓国風に漢字をつけM氏になったそう。P氏は時々人生には不思議なことが起きるといふ。私は彼の人生歴になにかいいことでもあったのか質問すると、彼は長い話を始めた。

私の人生には不思議な事が起こる。戦後、私は10坪程度の他人の土地にバラック家を建てて生活していた。ある日本人が、その近くでパチンコ店を建てようとした。パチンコ店主から住んでいる場所を譲って欲しいという交渉があったが、私は固く断った。パチンコ店の駐車場に車が入り出すのにその家があると、どうしても不便だといふ。パチンコ店主は60坪以上ある家を登記して移転させてくれた。すごい儲け物をしたわけだ。奇跡だ。いわば雷幸運(ビョラクブジャ)であった。

P氏(77才)は韓国慶尚南道密陽郡で生まれた。韓国で尋常小学校を卒業した後、1938年に炭鉱で仕事をしている遠い親族を頼り、福岡にやってきた。福岡では中学校2年まで勉強した。その後、大阪で金物工場・アルミニウム工場・ガラス工場・アンプル製造工場などで仕事をした。徴兵召集のため身体検査を受けて、召集令状が出る前に韓国に帰るつもりで、故郷に近い福岡で召集を待つことにした。その時に、親族のM氏が長崎の飯場(飯場とは人夫組織である)の仕事をしていた関係で、1943年に長崎に移り、飯場の事務員として働いていた。そして、爆心地から3キロという地点で大きい建物の中で被爆した。

数年前に韓国の故郷である密陽に帰ったそうだ。父母はもちろん亡くなっていたが、遠い親族が釜山やソウルに住んでいたので、その親族と会った。また、北朝鮮にも行ったことがあるそうだ。

P氏から飯場の話を聞いた。軍人として召集される前のP氏に上司はほとんど小言をいわなかった。飯場長は契約によって人夫を連れてきて仕事をさせていた。飯場長は自分の親族とともに飯場を運営していることが多い。その仕事は、いくつかの飯場長をまとめている組長が憲兵司令部などに取り入り、取ってくる。人夫たちは逃亡しようとすればできないわけではない。給料をきちんと受け取っていればできるはずであった。しかし、人夫の給料は韓国の実家に送ってくれることになっていた。人夫たちにその時の給料が記憶にないのは直接受けたことがないからである。市内に行く交通費程度はもらなかった。お金があっても店がなくて使えなかった。

人夫たちは飯場のなかで寝食をする。食事は飯場長の妻が作り、メニューは豆、麦などを混ぜたご飯、ワラビなどであった。お手洗は外にあり、入口に台所があって、中には通路があって、両側に畳部屋があった。風呂やストープはなかったという。入浴する所がないから夏には海で洗った。石鹸も貴重品だった。

当時、長崎には強制連行されてきた人を収容者といっていた。5000人ともいわれた彼らは秘密工場や造船所の中で仕事をして、外に出ることはなかった。飯場の仕事とは違う。P氏にそういった朝鮮人が働いていたところを案内してもらった。案内してもらった地下秘密工場の跡地は、長崎市内の中心地近くの丘にある。そこで、朝鮮人2000人程度が集中的に集まって仕事をしていたそうである。いまは、秘密工場の跡地は塞いであるので、全体像は分からないが、相当広い地下工場だったようだ。その地下工場は、朝鮮人らが掘ったものだという。そして、ここで働いていた朝鮮人は原爆のため全員亡くなったとのことだ。

また、P氏自身が働いていた場所に案内してもらった。いまは飯場だったところは残っていない。その場所は、長崎特有の入り組んだ海岸沿いにある。そのあたりに通じる広い道路やトンネルは、戦後に造られたもので、戦前の道はほとんど狭い道だったそうだ。この近くには強制連行されてきた朝鮮人

が働いていた造船所もある。

ある絶壁の前に車を止めた。そこは、人間魚雷回天を造ったトンネルの跡地だという。人間魚雷とは、いわば海の特攻隊だ。その工場の穴を掘るのは朝鮮人であったが、朝鮮人には何を作るかを絶対に秘密にした。朝鮮人たちは中を見ることもできなかった。この一つのトンネルが一つの組立工場だ。日本人技術者らが魚雷製作中に失敗して、工場のなかで死んだ人もいるそうだ。三菱造船所は当時軍艦を作っており、軍と直結していた会社だ。いかに日本政府とのつながりが強いかを説明するために P 氏は「皇居前にこの会社の名前が記されている」と話してくれた。朝鮮から強制連行されてきた人々は隔離されており、普通にわたってきた P 氏たちとまったく接触させなかったという。P 氏は現場を指差しながら大きい声でこの悲惨な状況を説明していた。その時、黒色の車が止まり、パンチパーマをかけた 50 代後半の男性が窓を開けてこちらの話を聞いている。P 氏の声は一層トーンが高くなった。私はムービーカメラでの撮影に夢中であった。同行した二人はその人がヤクザもしくは右翼関係者のように思われ、非常に怖かったと後で聞いた。しかし、私は熱心に話を聞いているそのパンチパーマの男性の感想を求めてカメラを向けた。二人は危機感を感じていたという。しかし、意外にもその男性は面白く貴重な話だといい、自分の近所に住む朝鮮人の話をして下さり、案内までしてくれた。二人は危機感から解放され安心したという。

案内されたところは、細い山道があるがいまその道は使われていない。かつては、朝鮮人の家が 13 戸あり、屠殺場もあった朝鮮人村だったそうだ。いまは彼らが引越して、大陸に退去し、新しく日本人村になった。ところが、いまは老人ばかりが住んでいる場所になった。急な斜面にある家に行くまでの階段には、夜光塗料が塗られている。ここの山道は老人が歩くのは困難な道だ。私がかここを訪ねた時、住民に土地測定のためにきたのかと質問された。山の傾斜地に飯場があった。ここで労働した多くの朝鮮人は戦後働き口がないために帰国した。

パンチパーマの男性の近くに住んでいた朝鮮人某氏はダイナマイト技師であり、福島出身の日本人女性と結婚した。二人の息子と娘がいる。妻とは入籍をしなかった。子供はお母さん側の日本籍を取得した。一人の息子は自

殺に近い死に方をした。差別が激しく生き辛かった。結婚と職業の差別だ。戦後、朝鮮人と結婚するだけで日本国籍が喪失され、朝鮮人になるということで入籍しなかったようである。夫は戦後仕事を失い、山の傾斜地に家を建てて暮らした。10坪程度の土地に建てた家を市からの払い下げで買った。最近、彼が亡くなった。しかし、婚姻届をしていない日本人の妻や息子はこの家を相続出来ない。これも悩みの種である。今相続のために裁判しようとする費用がかかる。息子は貧乏でどうにもならないという。今、孫夫婦が母親と一緒に住んでいる。近所の人はそのような土地を所有したが、登録せず韓国に行ってもどってみたらすでに他人のものになっていたということもあったので住みつけなければ他人のものになるという。その未亡人は被爆手帳を持っている。戦後、夫が肉体労働もできず困難な状況にも餅などを作って夫の世話をした。その彼女が土地一坪も受けることができないことはあまりにも悲惨だ。彼女は今 84、5 才で病院に入院中だ。

そこから南西にある軍艦島（端島）を見に行った。軍艦島へ行くために波止場で船に乗った。高速船の先端にカメラを持ってしゃがんでいたが、そのスピードがととても怖かった。数分で軍艦島が目の前にはっきり見えた。炭鉱の島として栄えていたが、1974年に閉山された後、今は誰も住んでおらず、釣り人らが釣りをするためにわたるぐらいだ。この炭鉱では、500メートル程度の海底で石炭を掘った。掘っている途中で崩れて数多くの人がそのまま生き埋めにされた。この島には学校、アパート、神社までもあった。戦前この島ではお金が稼げるし、学校もあるので炭坑夫がよく集まったという。小さい島の炭鉱地であるが、このような設備は全国で唯一である。朝鮮人らが住んだ香焼町安保の炭鉱跡も見て回った。この場所は戦争中には軍の指揮下にいた。戦争中には遠く見渡すなど注意されるほどであった。

P氏は戦後日本人女性と再婚して二人の息子をもうけた。長男は地方の国立大学を出てきて 東大の研究科で修士課程を修了したにもかかわらず 50歳を過ぎて結婚出来ていない。朝鮮語を知らないので朝鮮人とも結婚出来ない。彼は学歴というものは助けになる人もいるが、助けにならない人もおり、学歴を自分自身で生かさないとむしろ害になるものだといいつつながら皮肉な表情をした。長男は職場がなく今パン屋で仕事をしており、次男は自営業をし

ている。日本人の差別はひどいと繰り返す。私はP氏と別れながら在日朝鮮人がほんとうに差別されていることを実感した。